

報告

村の中で育った子どもたち

中 江 和 恵

(東京家政大学)

東京家政大学で教えています中江です。最初にパンフレットで日本史というふうに書かれてしまったのですけれども、もともと教育学専門で、特に教育学の中でも日本の子育ての歴史というようなことをやってきました。それで、授業の方は育児学とか、家庭教育とか、やっています。子どもも三人育てていますし、そういうようなこともあってそういう授業をやっているわけです。

今日お話しする内容ですけれども、一応レジメでは「村で育った子どもたち」と表題をつけたけれども、日本ではどういうふうな子どもが育てられて来たかというようなことを、全体的にやはり見たいと思います。少しレジメを早く作らなければいけなかった事情で、レジメの順番でいくということではなくて、自由に話させていただきたいと思います。

日本人がどのようにして子どもを育てて来たかということですが、一般に子どもを育てるという行為、育児をするということは長い年月に渡っても変わらない。それぞれの民族の中でずっと伝

えられて来ている。民族よりも更に、もっと地域ですね。地域の中で代々伝えられて行くものです。今ですとマスメディアの情報がたくさん入りますから、伝えられて来たもの、親から子へその村で皆がどうしているかと、そういうふうに直ぐ自分の周りの生活としてあるもの以外からの影響というものを受けますけれども、そういうものない時代ですともう本当に日々食べたり、眠ったりする生活と同じようなもののわけです。子どもを産んで育てて行くという行為自体が、地域の習俗、文化というものです。で、そういうものというのはそう簡単に変わるものでもないし、今だって実際問題としては、何かの情報などもどんどん耳に入りますけれども、むしろ隣のおばさんの言っていたこととか、自分の親のやってきたこととかをふと思い出して気になったり行動したり自分の育て方についてふと思うようなことがある、そういうのが実際ではないかなと思うわけです。特に昔、外の刺激がない時代というものは、自分達の集団内部でしている育児というものに対して、それが変わっているかどうかとか、そういう意識というものは当然もつことが出来ないわけです。日本でも集団内部で特別に意識されない育児というのが、ずっと行われて来たわけです。それがいつ意識されるようになったかと言いますと、外からの刺激が入った時期ということに当然なるわけです。そうするとそれはいつかという明治維新の時期なのです。それまで、江戸時代鎖国もしていたし、生活も人の流れが流動的でないから変化がないわけです。けれども明治維新になって外国からの考え

方が入って来たわけですから。考え方はどんどん入って来ているわけですが、それこそ先程言いましたように、日々の生活としての子育てというのは、そう簡単には変わりません。それは徐々に知識が入って来た段階でということ、それから農村中心の生活から都市へ人口が移って行くということ、それから徐々に学校教育が普及して行ってそれこそ知識の面で一般の人にも新しい考えが伝わって行くというそういうプロセスを経て変わってゆくわけです。それと育児に関して言えば非常に大きな理由になるのは職業が世襲でなくなることなのです。

つまり子育てというのは、日々の生活の中にあるのだけれども、その一つの非常に大きな目的というのは、その職業を子どもに、一人前にすることですけれども、一人前の内容というのは職業を子どもに伝えるということなのです。それが世襲ではなくなるということで徐々に学校の影響が大きくなるわけです。

育児の内容についてお話ししなければならぬのですけれども、まず西洋式の育児法とはどういうふうな知識として入って来たかと言いますと、先程言いましたように明治の初期にいろいろな知識人の間で、本などとか、知識人が外国で見てということが入って来ます。それと同時に私達がそういうふうな受け入れたということ、そういうふうにして少しずつ入って来たわけです。その入った段階でそれまでの日本人がどういうふうな子どもを育てて来たかということが客観的に光を当てられる、見えて来るわけですから、それが、どういう形でわかるかと言いますと、一番よくわかる

のは江戸時代末期から明治の初めにかけて欧米人が来日して来ているわけです。その人達が日本の子育てについて非常に、いろいろと書いているわけです。その記録というのが、今の私達が昔の江戸時代の人達の昔の様子を見たような目というか、そういうふうな感覚で見ることが出来るわけです。その中で共通に指摘されていることというのは、一つは日本は子どもの天国だということです。子どもの天国、赤ん坊の天国であるということが指摘されています。

例えば大森貝塚の発見者として有名なモースというアメリカ人がいます。『日本その日その日』という本を書いていますけれども、その人は日本人は子どもを一人でおいておくことがないというのです。いつもお母さんやおばあちゃんにおんぶされていたり、少し大きくなると年上の子どもにおんぶされている、朝から晩まで幸福そうにしていると、それとか少し大きい子ども、明治初期ですから学校に行ったりもしていますが、家で自分の親のそばで仕事を手伝ったりして非常に幸福そうであるということです。なにもかも子どもに尽くす存在が母親だということなのです。このことはモースだけでなく他の人も共通なことを言っていますが、モースは特に詳しく書いています。それからお祭りなどでも大人と子どもとがいつも一緒になって楽しんでいるということ、この人は日本は児童問題を解決しているという書き方をしています。それからイギリスの初代駐日公使のオールコックという人がいます。この人は江戸時代末期に『大君の都』というのを書いてい

ます。大君というのは將軍のことです。つまり江戸のことを書いています。子どもと犬はどこにでもいて、赤ちゃんはいつも母親の背にいたりとか、それから父親も非常によく子守をするとか、父親がいつも腕に子どもを抱いていて江戸の町をあちこち歩き回ったり仕事をしたり、そういうことをしたりするのが非常によく見られて、特殊な光景ではなくて、やはりこは捨子の養育院などには必要のない国なのだというふうに書いています。

それから他にもイザベラ・バードというイギリスの女性が『日本奥地紀行』というのを書いています。この人は明治一〇年頃来日して、ずっと北海道の方まで江戸から旅行したわけです。日光の方の記述で、男の人が朝六時頃に二歳にもならない子どもを抱いて集まって塀の下に腰をおろして、皆で話したり遊ばせたりしている。皆男の人でも子どもをかわいがって自慢話をしているような感じで、よその子に対しても非常にかわいがる、これほどかわいがる人を見たことがないを書いていくわけです。そういう記述から見て、日本のその当時の子どもの生活の特徴というふうなものを幾つか掲げることが出来ると思うのです。

一つは親と子の問題が非常に濃密である。ただそれが今ですと、母子関係が非常に濃い、母と子と密着しているということとはよく言われるのですが、そういう感覚ではなくて大人と子どもというのが同じような世界に住んでいるわけです。同じようなというのは仕事の間でも、遊びの間でも共通しているわけです。常に大人の生活の中に子どもが混在しているというのか、心理的にも本当

に子どもと一緒に祭りを楽しんだりするそういう気持ちをもつことが自然な社会なわけです。こういう社会であるというのは何も日本だけでなくて、西洋などでも古い時代にさかのぼればそうなんですね。

フランスの歴史家でフィリップ・アリエスという人がいます。

この人は『子どもの誕生』という本を書いて一五〜一六世紀の頃の子どもの様子を風俗画とか、いろいろなものから検討しているのですけれども、常に子どもというのは大人の仕事とか、遊びとかの場所に混在しているということを書いていきます。ですから近代以前の社会では大人と子どもの関係というのが、今と違って常に一緒にいるという関係があったのではないかと思うわけです。それから躰なども非常に穏やかなのですね。これはやはり伝統的にヨーロッパ等に較べても鞭を使う躰ということとはしなくて、言葉で言い聞かすというふうなことを、一六世紀に来日した、『日本史』を書いたフロイスが言っています。言葉で言い聞かす以上に母親と子どもとが感情的に、非常に近いということです。近いから理論で納得して従うのではなくて感情に、例えば母親を悲しませることをしてはいけないとか、やはりこんなふうにこんなことと論じられたら、わかってもらわなくても従うとかそういうふうな感情の近さからくる服従というのか、そういうふうな親に従う感覚というふうなものがあつたのではないかということが考えられるわけです。それから衣類なども非常に緩やかなものを着せていたということで、これももう古くからの絵巻物で見ますと日本で

は子どもは殆ど裸で生活しています。かなり小さい赤ちゃんとか、ハイハイしている子どもなどでもオムツもしていなくて、絵巻物などでは全身裸でそして大人達が水汲みをしたり働いているそばにいろというふうな絵がたくさんあります。もちろん裸だけでなくて衣類にしてもどちらかといえは緩やかなものです。

ヨーロッパなどの習俗では「スワドルリング」というのがあるので、すけれども、これは身体をグルグル包帯みたいなもので巻いてしまします。これは生後七ヶ月〜九ヶ月までの間にやるのですけれど、古代エジプト以来一七〜一九世紀頃位まで行われていたのです。理由はいろいろで身体を暖めるとか、自分（子ども自身）が動き回ってもケガをしてもいけないので、動き回らないようにとか、身体にキズをつけないようにとか、それからわりとキユツときつく締めると抱かれる感覚と近くて赤ちゃんが安心するとか、そういうような理由があつて「スワドルリング」というような習俗が行われていたわけです。日本ではそういう習慣というのはぜんぜんありません。その代わりどういふふうに扱つて来たかというとおんぶです。ヨーロッパ、アメリカ人にとっては大変珍しかったということで、共通に指摘されています。日本ではおんぶはいつからされていたかと言へば、これも大変古くて、縄文時代の土器や、古墳時代の埴輪等にも子どもを背負ったものがありまして、絵巻物などにももちろんおんぶの絵があります。絵巻物の時代とか、江戸時代等もそうですが、おんぶといつても乳児のおんぶの場合は、今みたいにおんぶ紐みたいなものを使うわけで

はなくて、着物の背中にスッポリ入れてしまふのです。その外側からお尻の部分に帯を当てて前で結んだりとか、安定のよいようにはしたりはするのですけれども、そういうふうにはスキんシップというか、ベッタリ身体にくっつけて育てる。赤ちゃんの方も殆ど裸という育ち方ですからそれこそ肌と肌をくっつけるようなおんぶをして来たわけです。だつこなども胸に直接入れるとか、そういうふうなことで非常に肉体的に密着する、ある意味では動物に近いと言つていいかもしれませんけれども、そういう子どもの育て方をして来たということです。アメリカの文化人類学者でルース・ベネディクトという人がいます。この人は『菊と刀』という大変有名な本を書いています。この人は第二次世界大戦中に日本を研究しているわけです。来日してというわけでなくて、当時のようにするに外国人のいろいろな研究を基にして分析しているのですけれども、日本とアメリカでは人生の生活曲線が違ふというわけです。日本では赤ん坊と老人に、最高の自由と我がままが許される、だから徐々に大きくなつて力がついて大人になる、青年になつて一応一人前の大人になる、そうなるにつれて拘束が厳しくなる。つまり周りの規則、はっきりした文章での規則ではないのだけれども結局縛られるというのか、いろいろ制約を受けることになるといふのに、アメリカでは逆に赤ん坊は産まれた最初から非常に制約を受けるということです。例えば授乳するには時間決めの授乳するとか、どんなに眠くてぐずついても、今が寝る時間ですよと言うまではほつたらかしているとか、それから手など

動かすようになって、身体のおちこち触ると手をたたいて制止させるとか、そういうような躰方をして、産まれた最初の日から赤ちゃんの要求がこの世の至上のものでないということを教えて、大人の規則に従わねばいけないことを教えるのだけれども、日本では赤ちゃんはとにかくオッパイは飲みたい時はいつでも飲めるし、オッパイが飲みたくて泣いたわけではなくても甘えてオッパイを触れたりということも許されている、というふうに書いています。そしてアメリカではその代わり徐々に大きくなって、大人になって、知的にも肉体的にも自由に判断出来るようになったら誰の拘束も受けなくてよいのだけれども、又老人になると他人の拘束を受けるようになる、というふうな生活の曲線自体が違っているように書いています。このような日本の社会の中で、どういふふうにして子どもを一人前にしていったかというようなことをレジメでは村の行事というように書いて行っただけです。

日本の子育ての特徴というのはどこでも共通性はあるのですけれども、又それぞれの地域にもそれぞれ子どもたちを具体的に育て上げていく方法があるわけです。

これはレジメに少し書きましたけれども、柳田國男さんという民俗学の先生がかつて各地の農村とか漁村とかに残っている言葉を集めまして、例えば子育てのことを「児遣—こやらい」という地方があるんですね。これは中国・四国地方の一部ですけれども、「遣」というのは「鬼遣」とか、そういうふうにも使われて追

立てて前に押し出して行く、追い出して行くという意味があるのです。だから「児遣」というのは子どもを引っ張って教育するのではなくて、子どもとは弱いものですからいつ死んでしまうかもしれない、そういう子どもを霊の世界から押し出して育てて行く、そういう意味があるのだというようなそんな解釈を加えるような形で各地の言葉を集めて比較検討するという方法をとっていらっしゃると思います。その成果が『産育習俗語彙』といって、お産や子育てに関する言葉の集大成というような形で集められているのです。その中で言葉を見ていくと子どもを育てていった行事の名前などが残っていて、その中で一つ見てわかることは、昔の日本の社会の中では非常に乳幼児死亡率が高かったわけで、親だけの力では子どもは育つことが出来ないのだというふうに考えられていたことです。親以外の何かという氏神の加護です。それともう一つは村人達、親類とか縁者です。関係ある人達の支えがどうしても子育てに必要なのだということです。だから子育てをしていく段階でのその行為というのも、一つは氏神の加護を願うということ

です。それともう一つは支えてくれる人達と共に成長する機会にするというのが行事としてあったわけです。行事自体は今でも形として残っていますが、考え方の方は今は余り関係なくなってしまうような面があります。

で、内容も簡単に説明したいと思います。最初にレジメの方でも書きました妊娠五ヶ月目の「帯び祝い」ですけれど、これは腹

帯を締めるお祝いです。地域によっては夫の古いフンドシを腹帯にすると、お産が軽いとか、そういう記述もありました。当時、江戸時代末期は（明治初期までありましたけれども）大変間引きというものが多かったようです。それは妊娠自体を調節することが出来ないということで、産まれて来た子どもを産まれて直ぐに殺してしまうという間引きが非常に多かったわけです。どのくらい多かったかといえば、育てるのが欲しい二人までということです。三人以上いるのはめったにいないという、それくらい間引きというのは多かったので、それで「帯び祝い」とするというのは妊娠した段階で今から産まれて来る子は育てる子であるということとを宣言するという意味があったということです。もちろんそれと同時に出産が無事済むように、皆で一緒に食事して妊婦に力を、皆の力を合わせて出産出来る力を与えようというような意味で一緒に食事をしていたというふうに考えられています。

それから赤ちゃんが産まれると赤ちゃん誕生の祝いということでお祝いが行われます。この時には「産飯・ウブメシ」とか「ウブタメシ」とか言われるご飯をたくさん炊くわけです。一升とか一升五合とかたくさん炊いて、お祝いにお手伝いしてくれた人達皆で全部食べるというようなことなのです。今ですと出産も病院などですみますから、実際に親類の人とか、地域の人達とか周りの人達の援助が見えにくいのですけれども、かつては常に金銭関係でない周りの人達の支えがなくては何も出来ないということがはつきりあり、常にそれに対してお祝いの形でお礼をするという

ことがありました。それから「名づけ祝い」、これは三日目とか六日目とか七日目に名前をつけるお祝いですけれども、この時に名前をつけてくれた人を名づけ親と言わずと後々までも子どもを見守ってもらったというようなことがあったわけです。名づけ親というのも仮親と言いまして、実の親の目の届く範囲というのは狭いし、子どもというのはその範囲だけで育つことは出来ないのです、たくさんさんの模範的親子関係、仮の親子関係というのをたくさん作って、たくさんさんの大人達の力で子どもを見守ろうという考えが仮親というわけです。それから生後一ヶ月頃「お宮参り」があります。これは「部屋あき」とか、「忌み明き」とか、「孫抱き」とか言われます。出産は産屋でしたのですね。産屋というのは土地によって違いますが、地方によってはいろいろありまして、産科病院のような意味で、仮の小屋、ほったて小屋のようなものを村の共同のものとして作ってそこでお産をするとか、そういうものとしてあったのです。お産というのは出血を伴うということで、やはりそれを忌むということです。出血を嫌がると言ったらいいのか、そういう意味があって部屋での出産があり、又産後一ヶ月たって産屋から出るわけです。それから「忌み明き」なども同じことで忌みが明けるということです。どちらにしても母親の方の身体の忌みが明けるということです。それと同時にお宮参り、赤ちゃんが初めて外出していい時期になったということで抱いて外に出して神社に参るわけです。そして氏子に入れてもらって、これから氏神さまの加護のもとで無事育つようにというお願いで

すね。そういう意味があるわけです。で眠っていると起こして泣かせたりとか、それから縁の下にちよつと置いて泣くまで待つとか、とにかく氏神さまにこの子がいますということを聞き届けさせるというような風習が各地に残っていたわけです。他にもそういうお祝いの行事は「食い初め」「初節句」「初誕生」などもありますけれども、それから三歳とか五歳とか七歳のお祝いなどもあるわけです。七歳までは神のうちというわけで、七歳までは大変子どもというのは弱い、実際そうですけれども。特に昔は衛生状態が悪いか、栄養状態は悪いか、そういうことで乳幼児死亡率が非常に高くて、七歳までの子どもというのはいつ死んでしまうかわからないというふうに思われていて、死んでもお葬式なども簡単にするとか、お墓に埋めたりしないで縁の下に埋めるとか、死んでしまうのは覚悟の上というような考えがあったわけです。ですから正式に氏子入りするのも七歳になってからで、村での活動というか子ども組に入るとするのもそれからです。

もう一つ七歳以後重要なのは七歳から一人前になる準備をするということ。男の子は父親の仕事を手伝って、女の子は子守とか家事などをするわけです。とにかく嫌がらずによく働く、一応一人前の村人になってゆくというのが目的であったわけで、一人前にしてゆくというのは非常に親にとって大切な仕事といえますか、親がしていかなければいけないことだったわけです。仕事を見習わせて教えてゆかなければいけないわけです。一五歳前後に成年式が行われまして、その後若者組・娘組とか、そういうふ

うな集団の中に入りまして、男の子は若者組、女の子は娘組ということ。で集団生活しながら村の共同の仕事をしながら行くということです。そしてその中で仕事しながら男女間の交流もあって、結婚相手も決まって行く、結婚して一人前であるという、だいたいそういう自然のプロセス、生活の中に組み込まれていた子育てのプロセスというものがあったわけです。

仮親もレジメの方にバラバラと書いておいたのはもういいかと思えますけれども、例えば「守り親」などというのは子守の親なんです。これは宮本常一さんという民俗学の方が伊豆の新島のことと報告していらっしゃるのですけれども、赤ちゃんが産まれるとすぐに、親戚の誰その娘とかで（七歳でもう女の子は子守というのが非常に重要な仕事ですから）子守の子が決まるわけです。すると子守の娘というのは常に赤ちゃんと一緒に生活をする、赤ちゃんの子守をすること自体が仕事なわけです。娘にとって赤ちゃんの親は自分の親よりは少し若い大人であるし、赤ちゃんにしてみれば子守のお姉さんの親というのは、子守のお姉さんにくっついていつもそのお姉さんの家にも行くので、自分の親と同じように面倒みてくれる親ということで、子守の親というのは「モリット」「モリツカア」というような呼び方をして、本当に自分の親のような関係であったと書かれています。

あと、ある程度大きくなった年齢の子どもというのは自分の本当の親だけでは育たないということで、これは文章に残されているものでは、大原幽学という江戸時代末期の思想家です。この人

は房総で荒廃している村を建て直そうという、そういうようなことをしたのですけれども、「預かり子」という制度を自分が指導している村人達にさせているわけです。七、八歳から一五、一六歳の子どもをお互いに一、二年ずつ預かり合うわけです。預かるというのは、ただ預かるのではなくて、預かって自分の子どものように躾、仕事を教えて行くということです。幽学などは具体的に、そういうときの心得というようなものを書いていきますけれど、他にもある程度大きくなった子どもを躾奉公とか、躾約束という形で預けて教育していくというシステムは各地にあったわけです。非常に中途半端ですけれども、時間がないようですので…。

だいたい日本の子育てということで、この辺で終わらせていただきますと思います。